

Jによる8クイーン—その1

西川 利男

この間、古い書類を整理していたら、なつかしい雑誌が出てきた。フランスのAPL誌《Les Nouvelles d'APL》に筆者の論文が載ったものである。しかし、自ら投稿したのではなく、真の事情は次のとおりである。

1994年にベルギー、アントワープで開かれたAPL94 International Conferenceに出席し、以下のようなポスターセッションの発表をしたことがある。

“APL as Multi-lingual Communication Tool: A Small Machine Translation System for English-Esperanto and Japanese-Chinese”, Toshio Nishikawa

このとき、フランスの原子力研究所の科学者G. A. Langlet氏と知り合いになった。ちょうど筑波の研究所でAPLと並んでエスペラントに熱をあげていた頃である。筑波のエスペラント同好誌Bufoに“Bonvenon al la mondo de komputilaj lingvoj”（コンピュータ言語の世界へようこそ）として、いろいろなコンピュータ言語の紹介を連載していた。その第2回目としてJ言語とそれによる有名なパズル8クイーンのプログラムを小論文として載せた。そのコピーをLanglet氏もエスペラントをやっているというので一部差し上げた。

Langlet氏はフランスのAPL誌の編集もやっている活発なAPLerである。さっそくに筆者のエスペラント論文をフランス語に訳し、それを掲載してくれた、というのが真相である。彼はこれ以外にも中国の学会で発表し筆者の英語論文を《Fourier et Hadamard en APL2》として同誌の別の号に載せてくれた。

そのLanglet氏は風の便りに数年して亡くなられたそうである。ヒゲもじゃのイカツイ顔付きで、どちらかといえば「ぶ男」だが、実は非常に親切な、堂々たる偉丈夫で、これこそ真のフランスの科学者なのか、となつかしく思い出される。

以下に掲載されたJの8クイーンのプログラムはいま見るとそれほどたいしたものではないが、Jのごく易しいプログラム例として、お目にかける。

Toshio Nishikawa, 《J le langage en fenetre le plus récent》

Les Nouvelles d'APL N° 14 (1995).

なお、人工知能の問題として8クイーンの解の探索を行うプログラムは、あらためて次回に「その2」として報告する予定である。